

連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第9回

花に来る虫たちーハナアブとヒラタアブ



本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(9) 花に来る虫たちー

ハナアブとヒラタアブ

ハナアブやヒラタアブは分類学上ハエ目に属する昆虫たちの中の一部です。昆虫は普通4枚（＝2対）の翅をもっていますが、ハエ目の昆虫は翅を2枚（＝1対）しかもっていません。この翅は普通の昆虫の前翅に当たるもので、後翅は退化して平均棍（へいきんこん）という棒状の器官に変化しており、飛翔の際、バランスをとるのに役立っています。

ハエ目には、マラリヤ、デング熱、日本脳炎などを媒介するカの仲間や、キンバエ、イエバエ、ニクバエなどの不潔な昆虫が属していて、あまり良いイメージではありません。一方、ハナアブやヒラタアブは花から花へ花粉を媒介する貴重な虫たちで、見た目もわるくありません。

とは言っても、ハナアブやヒラタアブは悪名高いキンバエやイエバエにごく近い種類です。このグループのアブとハエはあまり学問的な名ではなく、アブといえは不潔感がないので、便宜上アブと言っているのかもしれませんが。

やれ打つな はえが手をする 足をする (一茶)

小林一茶の著名な句ですが、ハナアブも手をするのを見たことがあります。やはりハエの親戚なのですね。もっとも、足をすっているのは見たことがありませんが。



「手をする」ルリハナアブ
6月中旬 上高井地区

ハナアブもヒラタアブも腹部の縞模様から、ハチの仲間に擬態して、外敵から身を護っていると言われています。どちらのアブも針を持っていませんが、ハチのような縞をもつことで、「刺すぞ」と表現しているのだと思います。

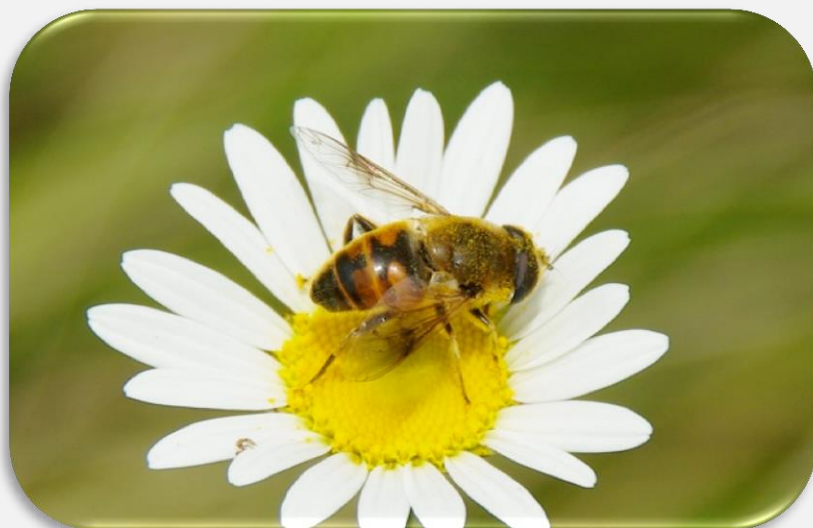
ハナアブもヒラタアブも、またハエの仲間にも見られる共通の特徴は、雄は左右の複眼がぴったり接触していますが、雌は両複眼が少し離れていることです。これは同種の雌雄を判別するのに、たいへん便利な指標です。下にその様子を示す写真を載せます。

タンポポの花の上の
ルリハナアブのカップル
4月下旬 本町地区
上が雄、下が雌
複眼の付き方に
注意して下さい



(1) ハナアブの仲間

ハナアブの仲間に「ハナアブ」という種名のハナアブがいます。ごく普通のハナアブなので、別名はナミハナアブです。以下混乱をさけるため、ナミハナアブとよぶことにします。ナミハナアブは一見セイヨウミツバチに似ているので、これを見てミツバチと思う人がかなりいるのではないのでしょうか。



ナミハナアブとシャスタデージー
5月上旬
3丁目東斜面

ナミハナアブの次によく見られるのはシマハナアブです。腹部の黒地に白または淡黄色の縞をもつきれいなハナアブで、タイトルページの左下に載っている写真もシマハナアブです。このハナアブもミツバチにたいへん上手に擬態しています。下の写真を見て下さい。

左：シマハナアブ
右：セイヨウミツバチ
花はビワ 上高井地区
12月上旬



オオハナアブも比較的普通に見られるハナアブで、「オオ」となっていますが、ナミハナアブより多少大きいくらいです。黒い背中に黄色い腹部。他種と見間違えることはありません。

みずき野周辺には「アシブトハナアブ」と名の付く3種のハナアブを見かけます。アシブトハナアブ、シマアシブトハナアブ、キヒゲアシブトハナアブです。最後脚の「もも」が太いので、アシブトとよばれます。



左上：オオハナアブとアカツメクサ	7月下旬	第2調整池
右上：アシブトハナアブとタンポポ	4月下旬	第2調整池北隣接地
左下：シマアシブトハナアブとハルジオン	5月上旬	第2調整池
右下：キヒゲアシブトハナアブ	5月中旬	本町地区

ルリハナアブは、背や腹部の縞がメタリックな輝きをもつ美しいハナアブです。文の冒頭にもルリハナアブの2枚の写真を載せていますが、下にも花の上のルリハナアブの写真を載せておきます。個体により、色彩の変異が見られます。ルリハナアブは関西方面ではごく希少な種になっていますが、みずき野周辺には春から夏にかけてかなり多くの個体をみることができます。



ルリハナアブとヤブガラシ

8月上旬

本町地区

ヤブガラシの花にも注目して下さい。緑色の4枚の花弁と淡黄色の雄しべをもつ完全な花がルリハナアブの脚の下に見られます。花弁と雄しべは短時間で散ってしまい、花盤と雌しべだけが残ります。このような完全な花は滅多に見られません。

ルリハナアブとシャスタデージー

5月中旬

3丁目東斜面

ルリハナアブは個体により色に変異が見られます。これは一部が黄金色。

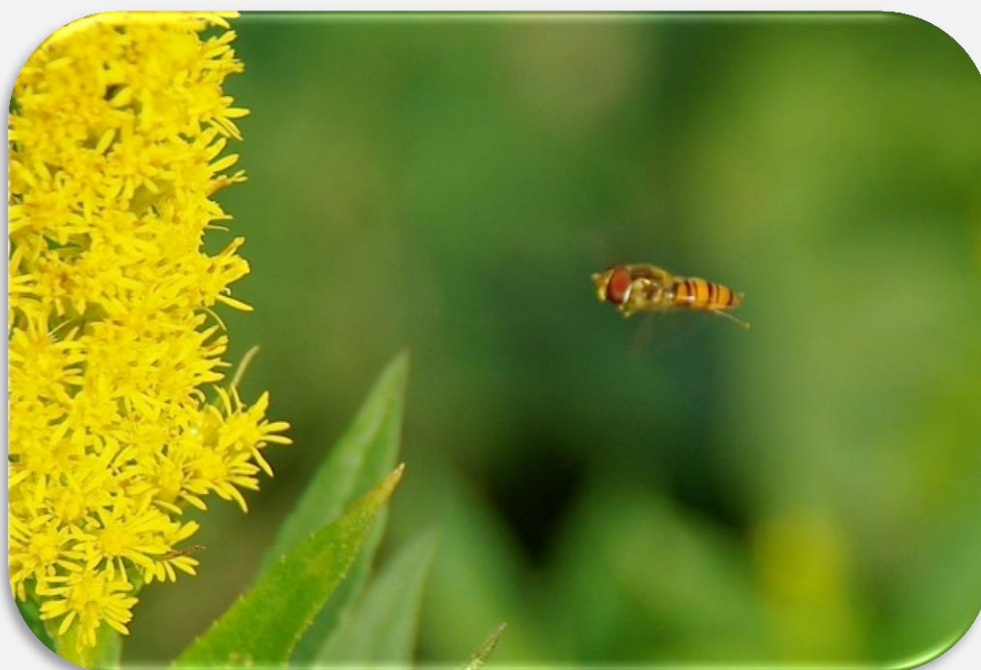


ルリハナアブの幼虫の生態は明らかではありませんが、ナミハナアブ、シマハナアブ、アシブトハナアブの幼虫はオナガウジと言い、どぶなどの汚水に棲み、腐植を食べて生活しています。長細い尾のような管をもつウジ虫で、管は水面から空気を取入れるためのものです。見た目が気味わるいので、不快昆虫とされますが、成虫になれば花粉の媒介者ですから、益虫と言えます。

(2) ヒラタアブの仲間

ヒラタアブはハナアブに近縁の昆虫ですが、幼虫の生態はハナアブと異なり、植物の茎や葉上にいて、アブラムシを食べて生長します。そのため以前はショクガバエ（食蚜蠅）と言われていました。「蚜」とはアブラムシのこと。幼虫時代はアブラムシを退治し、成虫になると花粉媒介者になるのですから、まさに益虫です。

ヒラタアブは目指す花に近づくと、しばらくホバリング（空中で羽ばたきつつ停止姿勢をとる）する習性があります。好みの花を見極めているのでしょうか。この習性から英語では **hoverfly** とよばれています。



セイタカアワダチソウの花に向かって
ホバリングするホソヒラタアブ
11月上旬 本町地区

ヒラタアブは、よく似た種類が多いので、写真だけで種を判定するのは難しいのですが、一応それらしいと思われる名を記しておきます。

ヒラタアブのうち、最も普通に目につくのは、ホソヒラタアブとミナミヒメヒラタアブです。春から秋まで、いろいろな花の上に見られます。





左上：ホソヒラタアブ雄とキツネノボタン

6月中旬

本町地区

右上：ホソヒラタアブ雌とヨメナ

10月上旬

本町地区

下：ホソヒラタアブ雌とムラサキツユクサ

11月上旬

7丁目

晩秋によく現れる型です



左：ミナミヒメヒラタアブ雄とハルジオン

6月下旬

本町地区

右：ミナミヒメヒラタアブ雌とハルジオン

5月下旬

本町地区

みずき野周辺には、ほかにフタホシヒラタアブ、ナミホシヒラタアブ、クロヒラタアブ、ホソヒメヒラタアブなどを見ることができます。ホソヒメヒラタアブはミナミヒメヒラタアブとそっくりで、正確に両者を識別するには、生殖器の形態の違いで判断するほかにはないのですが、一般にミナミヒメヒラタアブは通常体長8ミリ以上あり、ホソヒメヒラタアブはせいぜい6ミリ程度の大きさなので、写真のものはホソヒメヒラタアブと推定しました。



上：フタホシヒラタアブとシャスタデージー

5月上旬 3丁目東斜面

下：ナミホシヒラタアブとビワ

12月上旬 上高井地区





左上：クロヒラタアブとキク	1 2月上旬	上高井地区
右上：キアシマメヒラタアブとノチドメ	6月下旬	さくらの杜公園
左下：ホソヒメヒラタアブとノチドメ	6月下旬	さくらの杜公園
右下：ホソヒメヒラタアブとミチャナギ	6月下旬	貝塚地区

ノチドメ（チドメグサの仲間）やミチャナギ（タデの仲間）などの、直径がミリ単位の小さな花にはこんなに小さなホソヒメヒラタアブがやってきます。キアシマメヒラタアブはさらに小さなヒラタアブです。小さな花には相応の小さなお客がくる。植物と虫との共進化の結果そうなのではないでしょうか。これもまた自然の妙です。



(3) ツバキとハナアブ

もう一度ナミハナアブに話を戻します。ナミハナアブは成虫で越冬し、真冬でも少し暖かい日は陽の当たる場所にすがたを現すことがあります。

寺田寅彦の随筆「思い出草」に次のような一節があります。



「『落ちざまに蛇（あぶ）を伏せたる椿かな』漱石先生の句である。今から三十余年の昔自分の高等学校学生時代に熊本から帰省の途次門司の宿屋である友人と一晚語り明かしたときにこの句についてだいぶいろいろ論じ合ったことを記憶している。どんな事を論じたかおぼえていない。・・・」

続く文章には、次のようなことが書かれています。

ずっとのちになって、地面に落ちた椿の花は大抵上向きになっていることに気付いた。これは、枝から離れた花が空気抵抗と花の重心の位置との関係で上向きに落ちるためである。しかし、蛇が花の芯にしがみついていると、全体の中心が移動して、落下の際、花の反転作用が減じられるのではないかとされる（要約）。

科学者寺田寅彦の観察もさすがですが、それはさておき、この珍しい出来事を一句にずばりと表現した漱石の才能に感嘆しました。そしてその続きとして、動きの鈍い早春の蛇が恥ずかしそうに落下した花の下から這い出してくる情景を想像します。

啓蟄を過ぎる頃になると、ナミハナアブのすがたがよく目につくようになります。咲いてはぼとりと落ちるヤブツバキの花もこの頃はよく目立ちます。

漱石が見た花はヤブツバキ、蛇はナミハナアブであろうと思います。



2014 年 12 月
本吉 総男